

### Ⅲ バラエティーが「嫌われる」5つの瞬間

「このバラエティーのここがいやだ」「こういうバラエティーはやめてもらいたい」という視聴者の意見は、概略、次の5つに分類することができる。

- 1 下ネタ
- 2 イジメや差別
- 3 内輪話や仲間内のバカ騒ぎ
- 4 制作の手の内がバレバレのもの
- 5 生きることの基本を粗末に扱うこと

1から3は、わかりやすいだろう。4もむずかしくはないが、このごろは案外多いのである。

しかし、5については、少し説明がいるかもしれない。何を切実な「生きることの基本」にするかは、人によっても、生活環境や価値観によっても千差万別であり、一概には決められない。にもかかわらず、視聴者意見のなかには、「生きることの基本を粗末に扱うこと」としか分類できないようなものが、確実にある。これについてはのちほど、もう少し詳しく見ていくことにする。

一々の放送局や番組や出演者の名前は省略するが、思い当たる制作者は、ここで指摘されていることが「誤解だ」「深読みのしすぎだ」「見当外れだ」「もっとちゃんと見てほしい」等々と反論したい気持ちもあるかもしれない。

だが、これはあくまで視聴者が「バラエティーのこういうところがいやだ」と言っている全体の傾向がどんなものかを概観するための作業である。どの局、どの番組のことを言っているのかなどという下世話な詮索はやめて、現在の視聴者像を探るための手がかりとして、お目通しいただきたい。











お笑い芸人やスタッフが川のなかにバシャバシャ入っていき、国の天然記念物に指定されているオオサンショウウオを追いかけ回し、網で捕獲していた。「特別の許可を得ています」とテロップが出ていたが、出演者の大はしゃぎばかりが目立って、どういう意図があるのかわからない番組だった。画面から場所の特定もできそうで、心ない人たちのいたずらを誘発しそうだった。天然記念物である生き物をこんなふうに乱暴に扱っていいなどという許可は、誰が出したのか。テレビ局の見識を疑う。

学校を舞台に、若いタレントたちが先生と生徒になって、授業のように雑学コントをやってみせる番組で、先生役のタレントがヒトラーのことを、「演説上手で国民の心をつかんだ。その口調は癒しがある揺らぎのリズムで、国民は惹きつけられた」などと紹介し、世界の偉人として取り上げていた。視聴者からは「いくらコントでも、歴史認識のひどさは目に余る」「作者もタレントもまったく無知だ」等々のクレームが相次いだ。

\*

以上、BPOに寄せられた視聴者意見等を5つにパターン化し、例示してみたが、分類は便宜的なものであり、ざっと読んでもわかるとおり、ものによっては他の分類とかさなるものもある。

こうして並べてみると、いったいどういうときにバラエティーが視聴者からいやがられているか、おおまかな傾向はうかがえると思う。

さて、問題はここから何を読み取るか、である。

